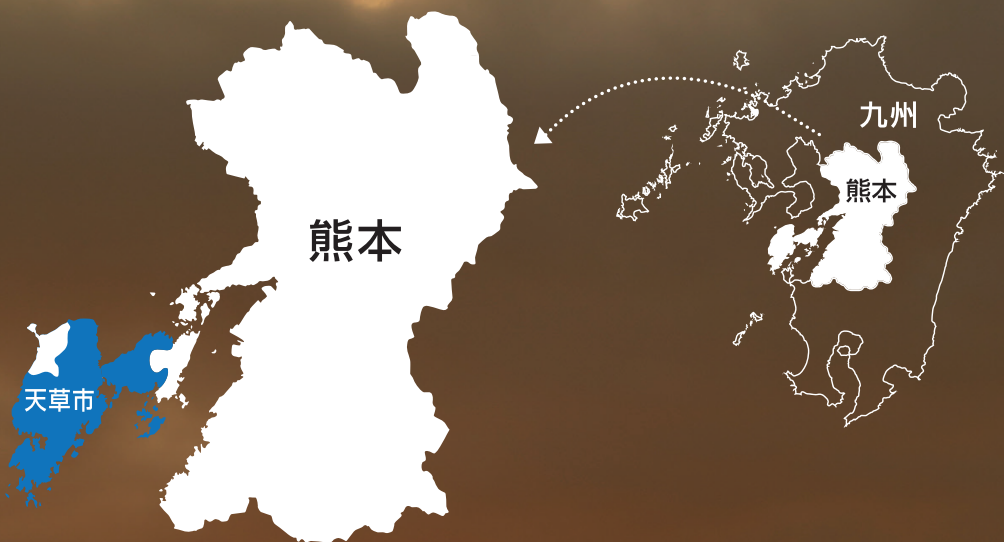




たいせつなひとを診る。
たいせつなふるさとで、

熊本県地域医療支援機構
熊本大学病院 地域医療支援センター内
熊本市中央区本荘1-1-1
TEL:096-373-5627
<http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/>
ご感想、ご意見お待ちしております。



写真/天草西海岸に沈む夕日

ここ、熊本で、地域の医療を支える。
CocODE! ココデ

2023 Spring vol.5

CocODE!

ここ、熊本で、地域の医療を支える。
ココデ

2023 Spring
vol
5

Top Interview

天草エリアと、
わたしが交わした
3つのミッション

河浦病院

SHINZO TSURUDA

鶴田真三先生

熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
河浦教育拠点 特任助教

写真/崎津集落にて

Take Free

熊本県地域医療支援機構 広報誌

CONTENTS

- Greeting
02 天草エリアで心通う連携医療を実践し
地域の健康を守る
河浦病院 院長 中川和浩先生
- 特集1
03 天草エリアと、わたしが交わした3つのミッション
河浦病院 鶴田真三先生
(熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座 河浦教育拠点 特任助教)
- 特集2
07 Think globally, Act locally!
天草市のDOCTOR-C
頑張る若手総合診療医対談
宮野遼太郎先生×重岡菜々先生
MIYANO RYOTARO SHIGEOKA NANA
- 09** がんばる先生の、がんばらない時間
河浦病院 鶴田真三先生・本田宏介先生・末綱靖先生・利根川雅俊先生
- 11** 患者さまからのメッセージ
船津智恵子さん
- 13** 教えて先輩！
若手総合診療医×医学部生との座談会
中村孝典先生
- 15** 医学部学生からのメッセージ
- 16** 医療まめ知識
熊本大学病院 総合診療科 佐土原道人先生
- 17** 地域医療の充実に向けた取り組み
- 18** 熊本県地域医療支援機構講演会を開催

COCODEは、
熊本県内で活躍する
医師の姿などを通じて、
医師を志す学生や
地域の皆さんに
地域医療の魅力を伝える
マガジンです。

GREETING

Our mission

天草エリアで
心通う連携医療を実践し
地域の健康を守る

天草市立河浦病院 院長

中川 和浩先生

1990年熊本大学医学部卒業後、熊本大学病院2外科に入局。県内の関連病院勤務などを
経て、2006年河浦病院に赴任。2015年4月、
同院院長に就任

県南の教育拠点病院として、 若い医師たちに学びの場を

当院は、外科、内科、整形外科、リハビリテーション科を標榜しており、主として天草下島の河浦町、天草町両地域の中核病院として機能しています。進行する少子高齢化社会、過疎化のなか、近隣の医療機関、介護・福祉施設などとの連携を密にして地域医療の向上に努めております。2021年には「地域在宅医療サポートセンター」を設立。交通の便が悪く、病院受診が困難な患者のため訪問診療や出張診療等に力を入れております。また当院は、熊本大学病院の総合診療科の教育拠点病院として、研修医及び医学生に対し、実践教育の場を提供しており、若い医師たちが当院で研鑽を積み、地域医療の現状について学びを深めております。

美しい星空や海など、豊かな自然に恵まれた天草エリアは、海の幸が豊富で、釣りなどのマリナクティビティが盛んです。これからも「心の通う医療」を提供し、地域住民の皆さまが安心して暮らせるよう、誠心誠意努力してまいります。

天草エリアと、 わたしが交わした 3つのミッション

鶴田真三先生が誓った

3 Missions

Mission 1

病院・医療を、住民とともに変えていく

Mission 2

地域の医療職が楽しく成長しながら、
地域貢献ができる仕組みづくりを

Mission 3

地域の課題を掘り起こし、解決に導く

海を見ながら思いを馳せる。天草の医療に貢献し、骨をうずめたい

世界文化遺産に登録された天草の崎津集落。集落にほど近い羊角湾で、寄せては返す穏やかな波を見つめる鶴田真三先生。「小さな湾に立ち、風のにおいや人々の暮らしについて思いを馳せます。地域を肌で感じると、総合診療医としてこの地に人生を浸し、骨をうずめたいという気持ちが強くなります」。

人の役に立つ仕事をしたいと考え、医師を目指した鶴田先生。人吉の病院で臨床研修を終えると、三重大学病院総合診療科の家庭医療プログラムに入り、家庭医療専門医、プライマリ・ケア認定医を取得しました。「熊本県以外で経験を積み“新しい何か”を熊本に持って帰りたかった」。

三重県では、山間部にある無医村で公立診療所の立ち上げに関わり、村にたった一人の医師として赴任。その地域にはもともと診療所があったものの、医師の引退を機に診療所を閉めるという状況でした。「あるものが、なくなるというのが住民の皆さんにとって一番不安なこと」と話し、規模や形態、経営面など、地域づくりの視点で行政と交渉を重ね、診療所を立ち上げました。

熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
河浦教育拠点 特任助教

つる だ しん ぞう
鶴田 真三先生

熊本県御所浦町（現天草市御所浦町）出身。熊本大学医学部卒業後、熊本大学病院、人吉で初期臨床研修。3年目より三重大学病院総合診療科に入局し、その後、三重県津市山間部の無医村となった場所で公立診療所の立ち上げに関わり、村にたった一人の医師として赴任。長女の小学校入学を機に熊本県に戻り、熊本大学病院総合診療科に入局。天草地域医療センター総合診療科を経て、2021年より現職。



三人の子どもの父親でもある鶴田先生

SHINZO TSURUDA

たった一人の ヒーローは いない

みんなで高め合い、みんなで作りあげていく

長女の小学校入学を機に、天草へ。そこで感じたのは、地域の人にもっと深く病院に関わってほしいということでした。「病院は、病気になってから行くもの」。そう考える人が多いと思いますが、病院の役割はそれだけではないと話す鶴田先生。「病院は、住民のもの。医療従事者だけでなく、住民の皆さんがもっと積極的に病院に関わり、自分たちが利用しやすいように作り替えていくことが地域医療の充実につながる」と話します。

また地域の医療職が楽しく成長しながら地域に貢献できる環境が大切とも。「アクティブな意欲を持つスタッフはたくさんいる。その方々と一緒に学び合い、成長し合うことで、病院も活性化し、人も集まり、地域への貢献になる」。

多職種でACP(Advance Care Planning)について学ぶ委員会を立ち上げたり、河浦病院と同じ敷地に立つ、天草西保健センター、河浦薬局、天草市社会福祉協議会河浦支所、天草西地域包括支援センターさざんかの皆さんとともに「しきちの会」を結成し、医療、保健、福祉の連携を深めています。「たった一人のヒーローはいらない。みんなで力を合わせてやるのが大事だと思います」。



国保診療施設に勤務する全国の若手医師により構成される「若手の会」で、九州、四国地区を取りまとめる世話人としても活動

総合診療医は、カメレオン

「河浦病院は、小規模病院・診療所などでのプライマリ・ケアを学びたい若手医師にとっては、最高の学習環境があるフィールド」と話す鶴田先生。「何をもって勉強というのかを考えてほしい。ジェネラルを目指したければ、ジェネラルの生々しさにどっぷりつかることが最先端の学び」ときっぱり。

「本気で探せば地域の課題が見えてくる。それをどう掘り起こして、自分がお手伝いできるのかを考えるとワクワクします」。それぞれの地域が抱える課題によって、どんな色にでも染まり、解決に導く総合診療医の仕事を「カメレオン」に例え、「楽しさややりがいは、誰かに与えてもらうものじゃない。自分で探すものですよ」と笑顔を見せます。



2万本のヤブツバキが自生する西平椿公園にて



「しきちの会」では、地域の保健医療充実のために、多職種連携を深めている



校医としても活動。「子どもたちと祭りやイベントなども一緒にやっていきたい」



若手医師対談



Think globally, Act locally!

宮野: 重岡先生は、地域医療実習で1カ月間、河浦病院に研修に来られて、多くのことを学んでおられますね。

重岡: はい。外来の見学や老健施設などでの陪席など、学びの日々です。河浦病院は総合診療医の教育拠点なので、教育体制が充実しているのがありがたいです。

宮野: 学びの中で、ということが印象的でしたか？

重岡: 入院患者さん全員のACP (Advance Care Planning) に配慮し、アンケートを取ることで、どのように生きたいのかを尋ねておられることに感銘を受けました。実際、私もひとりの患者さんにさせていただきました。

「今、楽しんでいらっしゃることはなんですか？」「検査の結果が厳しくても聞きたいですか？」など、お話をさせていただくうちに、患者さんの気持ちや考えなどを聞くことができました。

宮野: 患者さん本人の希望を叶えるため、また家族の満足度を向上させるため、院内でもACPに関する学びを深めています。看護師や介護職の方向けに講演を行うなどの啓発活動を進めています。

(※ACPIについては、16ページをご参照下さい。)

重岡: 宮野先生はACPの普及活動だけでなく、糖尿病の市民講座などの活動もされていますね。

宮野: 河浦地区は、特に糖尿病などの生活習慣病が多いんです。地元の皆さんに対して、無料で出張型の糖尿病の講演会を開いて、糖尿病の啓発に取り組んでいます。一步、病院の外に出ると、皆さんざっくばらんにお話して下さるので、いろんな話を聞くことができました。

重岡: 研究もなさっているんですか？

宮野: 週1回は熊本大学病院脳神経内科に通い、検査関係の研修を受けています。学会や講演会で神経内科関連の

発表などもしており、自分が興味ある分野に関しても学びを深めています。

重岡: 先生は地域医療の魅力はどのようなところだと考えておられますか？

宮野: 地域では緊急性を要する患者さんから、時間をかけてみていく必要がある患者さんまで、さまざまな人を診る機会があり、多くの症例に触れることができます。疾患だけでなく、家族関係や生活などを含めた“人を診る”医療は、やりがいを感じますね。これからも地域の皆さんの健康を守るために、お互いに頑張っていきましょう。

“人を診る”医療は、
やりがいにあふれています

河浦病院

みや の りょう た ろう
宮野遼太郎先生

MIYANO RYOTARO



ある日の宮野先生のタイムスケジュール

7:30 起床・朝食
8:30 外来
13:00 昼食後、訪問診療へ
16:00 病院に戻り、病棟業務
17:30 カルテチェック
19:00 帰宅後、夕食、入浴、ネットサーフィンなど
23:00 就寝

ACPへの配慮など、
総合診療医にとって大切な学びがここに♪

初期臨床研修医

しげ おか な な
重岡菜々先生

SHIGEOKA NANA



ある日の重岡先生のタイムスケジュール

7:30 起床・朝食
8:30 外来見学など
13:00 昼食後、老健施設で陪席
16:00 病棟業務
17:15 帰宅後、地元のスーパーへ
19:00 夕食(得意メニューは、天草産野菜たっぷり鍋♪)
22:00 就寝



／ がんばる先生のがんばらない時間 ／



河浦病院
鶴田真三先生

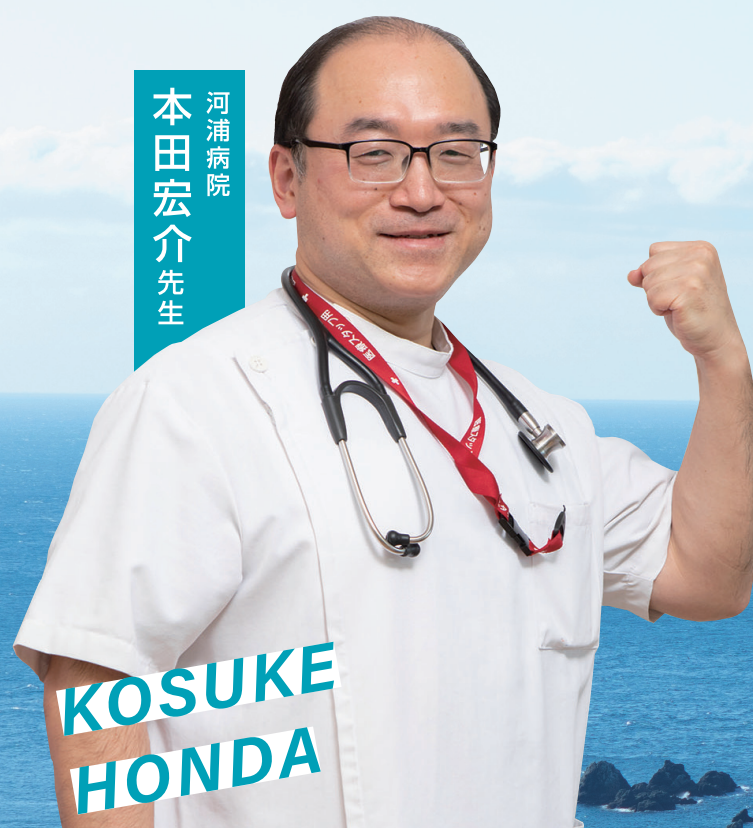
SHINZO
TSURUDA

人も自然も温かい天草で、 子どもたちとエンジョイ♪

「自分の家庭を守れない人は、人の家庭を守れない」をモットーに、家族の時間を大切にしています。家族で福連木子守唄公園に行き、どんぐり拾いをしたり、遊具で遊んだり、時にはハクビシンに会うこともあります。子どもたちだけでバスに乗って、図書館に行く社会勉強をさせることも。人々が温かい天草だから、できることです。



自然豊かな環境でのびのび育つ3人のお子さんたち



河浦病院
本田宏介先生

KOSUKE
HONDA

官舎の一室をトレーニングルームに！ 筋トレにはまっています！

病院の敷地内にある官舎に住んでいますが、部屋が複数あるので、一室をトレーニングルームにし、エアロバイク、ダンベル、ベンチプレス台を設置。運動不足やストレス解消のために週に2回筋トレ、週に2-3回有酸素運動をしています。時にはオンラインでパーソナルトレーニングを受けるなど、頑張っています。



「がんばる先生のがんばる時間」ですね(笑)」と本田先生



河浦病院
末綱靖先生

YASUSHI
SUETSUNA

釣りに はまっています

河浦に赴任して、10年目になりますが、赴任以来、タイ釣り、イカ釣りにはまっています。仕事が終わってから堤防や宮野河内湾などまでふらっと行ける環境がいいですね。研修医の先生が来られているときは、釣りにお連れすることもあり、とても喜んでいただけます。釣った魚をお刺身やお吸い物にして食べると最高です。



ビッグサイズのイカが釣れます



河浦病院
利根川雅俊先生

MASATOSHI
TONEGAWA

妻と2匹のウサギとの 生活を楽しんでいます

3年前からネザーランドドワーフという種類のウサギの女の子を2匹飼っています。軽い気持ちで飼いだめたのですが、掃除や餌やりなど、想像以上にお世話が大変で、子どもを育てるように健康管理にも気を使っています。周囲の方々に気兼ねなく、ペットとの生活ができる点は地方暮らしのメリットではないでしょうか。



ウサギの柚ちゃんと凧ちゃん

「崎津天主堂が見守る海辺の集落で。」

「先生のおかげで、一人で安心して暮らせます」

天草下島の南西部、深く入り込んだ羊角湾の入り江にある漁村、崎津集落。昔ながらの暮らしが息づくこの集落に住む船津智恵子さん(92)は、中川和浩院長の月に一度の訪問診療を楽しみにしています。



10年以上の長い付き合い。信頼する中川和浩先生とともに



船津智恵子さん



雪が舞い散る中、崎津集落へ向かう中川院長



「体調はいかがですか？」と中川院長

月に一度の訪問診療「先生と話すのが楽しみ」

「体調はどうか？短歌はよかとの書けたね？」と声を掛ける中川先生。船津さんは、近況や日々の体調を記録したノートを見せながら、「旅行に行った時の思い出を書き留めてるんですよ」「ひ孫も生まれたとですよ」と、話が尽きることはありません。

町長秘書だった船津さんは、自称“ミス崎津”！？

船津さんは、生まれも育ちも崎津集落。「自称“ミス崎津”ですたい！」とユーモアたっぷりに笑います。旧河浦町の元職員で、町長秘書として活躍。その後は、婦人会長やボランティアの観光ガイドを務めた“地域の顔役”的存在です。2008年頃から崎津教会近くにある知人の土産物店を手伝うなど、観光客との触れ合いを生きがいにしてきました。「T O K I Oの国分太一さんも私を訪ねてきてくれたんですよ」とニコリ。



クロスワードゲームと短歌が好きな船津智恵子さん



息子さんが車庫を改装してくれて作ってくれたという「崎津元若妻会サミット」会場

「崎津元若妻会サミット」を運営おしゃべりに花を咲かせて

足腰が弱くなり、自宅から外出することが少なくなっても、楽しいことが大好きな船津さんは、新しいことへの挑戦をやめません。年を重ねても地域の人との交流を続けたいとの思いで、自宅の車庫を改装し「崎津元若妻会サミット」と名づけたサロンの運営を始めました。以来、週に一度、地域の女性たちが訪ねてきて、おしゃべりに花を咲かせています。「まちの人の話や体調のことなど、いろんな話をするのが楽しい。メンバーは高齢なので、仲間の生存確認も兼ねています(笑)」。

先生の顔を見るだけで、元気になります

「中川先生の顔を見るだけで、ほっとして元気になる。神様みたいな存在です」と感謝の言葉を伝える船津さん。今は亡きご主人の主治医でもあった中川先生には、絶大な信頼を寄せています。「先生のおかげで、一人で安心して暮らせます」と笑顔を見せる船津さんは、これからも住み慣れたこの家で暮らしたいと話します。



「携帯でひ孫の写真をみると元気がでます」

Why GP?

若手医師×学生二人座談会 総合診療医のリアルを直撃 「教えて先輩！」

熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
熊本大学医学部医学科5年 中村水紀さん(左)
熊本大学医学部医学科4年 園川仁美さん(中央)
(熊本大学病院屋上ヘリポートにて)

くまもと県北教育拠点 特任助教 中村孝典先生(右)

日々、学びを深める医学生が抱える疑問や不安を、実際に総合診療医として活躍している若手医師に直撃する人気企画！今回はくまもと県北病院で総合診療医として働く中村孝典先生に、学生二人が、総合診療医の魅力などについて聞きました。

診断が難しいとき、どのようにこたえればいいのか？

中村先生：皆さん、こんにちは。私はくまもと県北病院の教育拠点で総合診療医として働いています。出身は熊本市で、妻と子ども3人の5人家族です。よろしくお願いします。

中村：よろしくお願いします。早速質問ですが、総合診療医はオールマイティに診なければならないというイメージがありますが、自分の苦手な分野の疾患や診断が難しい疾患などに直面した時、どうしたらいいのかなと不安です。

中村先生：総合診療医は、あらゆる症状や疾患を全人的に診ることになります。目の前にいる患者さんに、わからないことは、わからないと正直に伝えることや、自分よりも専門の先生につないだ方がベターだと判断した場合は、すぐにつなぐことが大事なことだと感じています。

中村：患者さんに「わからない」って言うのをためらってしまいそうです。

中村先生：私は、診療している際に疑問に思うことがあったら、その場で医療系のアプリやウェブ、教科書などで調べます。それでもわからない時は、診療後に先輩の先生に聞いたりして、次の診察時に患者さんにお伝えするようにしています。あいまいな記憶でなんとなく答えてその場を取り繕ったり、わからないことをそ

のままにせず、「次の診察時までには調べておきますね」と伝えることも、患者さんとの信頼関係を築く上で大切だと思います。

中村：先生にとって、どんなお医者さんが「いいお医者さん」だと思われますか？

中村先生：患者さんにとって何がベストなのかを常に考えて行動し、正直でうそをつかない医師ですかね。目の前の患者さんに誠実であれば、わからなければ必死になって調べますし、誠心誠意向き合うものですよ。

総合診療医になってよかったなと思う時はどんな時ですか？

園川：総合診療医になってよかったなと思う時はどんな時ですか？

中村先生：患者さんやご家族から感謝していただけたと感じるときは、うれしいですね。ほかの科の先生とコミュニケーションをとりながら患者さんを診ることも多いので、いろんな科の情報を得ることができたり、ほかの科の先生に感謝されることも多いのでやりがいがあります。また、総合診療医は、大学病院や市中病院、診療所、訪問診療など、さまざまな活躍の場があるという点も魅力ですね。専門性が高い専門医であれば、その専門に対して

ハード面とソフト面ともにそろった医療機関でしか力を発揮できないですが、総合診療医はどこにいても地域の役に立つことができます。

子育てと仕事の両立ができるか心配です

園川：子育てと仕事の両立ができるか心配です。

中村先生：私は4歳、2歳、0歳の3人の子どもの父親ですが、子どもを授かるまでは、バリバリ残業する人がカッコいいと思っていました(笑)。今は家庭を優先しています。子どもが小さいうちは“急に発熱した”など、想定外のことが起こりますから、仕事で仲間に助けてもらうことも多いと思います。だからこそ、普段の仕事は誠心誠意頑張って、そして、仲間が困っているときは、いつでも力になるよ、応援するよ、と伝えています。お互い様ですからね。逆にいうと、家庭を大切にしたいと思っていても、どうしても仕事で帰りが遅くなったり、休日に出勤することもありますよね。ですから、家族に対しても、平日頃から誠実に、手伝えることは手伝えるようにしています。特に女性は、ライフステージによって、優先すべきことが変わる可能性もありますから、職場全体でサポートするようなシステムができればいいですね。

学生時代にやっておいた方がいいことってありますか？

中村：学生時代にやっておいた方がいいことってありますか？

中村先生：将来の目標をあまり狭く選び過ぎずに、遊びも勉強もいろいろチャレンジしてみてください。臨床実習は、医療について学ぶだけでなく、患者さんや医療従事者との接し方を学ぶ場でもあります。医師はコメディカルの皆さんに支えられています。同僚の医師だけでなく、検査技師やリハビリの先生など、仲間の医療従事者が働きやすいように、指示を的確に出すのも医師の大切な仕事です。当たり前ですが、笑顔であいさつをしたり、感謝の気持ちを忘れずにいることはとても大切なことだと思います。

中村：中村先生、今日は貴重なお話をありがとうございました。「わからないことは、正直に伝える誠実さが重要だ」という言葉にハッとさせられました。

園川：子育てと仕事のバランスなどに不安を持っていたので、お話を聞けてよかったです。地域医療に貢献できるような医師を目指し、学びを深めます！

<Information>
熊本大学病院「地域医療・総合診療実践学寄附講座」のHPやSNSでは、勉強会やイベントなどの情報を発信しています！



「人生会議」を始めてみよう。

最近よく耳にする「ACP」や「人生会議」について熊本大学病院総合診療科の佐土原道人先生に教えてもらいました。

Q:「ACP(えーしーピー)」や「人生会議」って最近よく聞きますが何ですか？

A:「ACP」は、Advance Care Planningの頭文字で、厚生労働省は、「人生会議」という愛称で呼んでいます。将来の医療・ケアについての意向や希望を、普段から繰り返し話し合っておく過程のことです。

Q:なぜ「人生会議」は必要なのでしょう？

A:約7割の患者さんが終末期に意思決定不可能だったというデータがあります。また、事前指定書という終末期の意向を書いた文書があっても、患者さんの意向は変わることが多いことや、家族や代理決定者、医療者が必ずしもその意向を活かせないということが知られています。このことから、「人生会議」で普段から話し合っておくことで、人生の最終段階にある医療・ケアの選択だけでなく、住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができる可能性が高まります。

Q:どのような内容を話し合うのでしょうか？「終活」とは違うのでしょうか？

A:「終活」はご自身の老後や死亡に備え、葬儀、お墓、財産、相続、遺言などの意向について決めておくことです。「人生会議」では、ご自身が健康かどうかに関わらず、生死観・人生観、価値観、生活や療養の上で大切なこと／して欲しくないこと、もしもの時に希望する／希望しない医療・ケアなどが主な内容です。いったん決めた内容もいつでも変更可能です。



「人生会議」を始めるにあたって

1. まず、日頃の人生で大切にしていること、「もし」病気になった時、「もしもの時」の話として、身近な人との対話からはじめましょう。人生の時期や状況によって、意向は変わるので、人生会議は繰り返し行うことが大事です。
2. もしもの時に、あなたの代理決定をするのにふさわしい人を決めておきましょう。
3. 日頃の考えや思い、希望を何かに書き留めておくのもいいでしょう。現在通院・利用中の医療機関、サービスがあれば医療・介護従事者と内容を共有しておきましょう。
4. 自治体や医療機関が人生会議を支援、推進しているところもあるので気軽にお問い合わせ、利用してみるのもいいでしょう。

教えてくれたのは

熊本大学病院 総合診療科

佐土原 道人先生

(※7ページをご参照下さい。)



自治医科大学3年
A さん(熊本市出身)

勉強で工夫していることは、学んだ授業のプリントをその日のうちにファイルにまとめることです。そうすることでテスト前に、慌てて資料をまとめることなく済み、勉強がはかどります。人体構造の基礎を学ぶ解剖学に興味があり、肉眼で見ることで体の構造への理解を深めています。将来は、子供と対等に接することができる医師になりたいですね。



自治医科大学2年
松川 朋樹 さん(熊本市出身)

「系統講義」の授業では、スライドで患者さんの症例を見ることがあり、将来の自分の姿を想像しながら学びを深めることができるので、モチベーションが上がります。部活は、フットサルサークルと少林寺拳法部に所属しています。令和4年は活動できない日が続きましたが、令和5年は仲間と楽しんでいきます。将来は地域の方にとって親しみやすい医師になりたいです。

Message corner

学生の“今”に迫る
「医学部学生からのメッセージ」



自治医科大学3年
加藤 綺美 さん(熊本市出身)

なんでも治せるお医者さんに憧れ、総合診療医を目指しました。憧れは漫画『19番目のカルテ』の主人公・徳重晃先生です。勉強は大変ですが、再試の日人に被せて趣味の予定を入れ、「試験に落ちたら行程に被せて趣味の予定を入れ、頑張っていますけなくなる！」と自分に喝を入れて頑張っています(笑)。勉強で苦労している皆さんは、心の支えとなる趣味を見つけ、モチベーションアップにつなげるといいですよ。

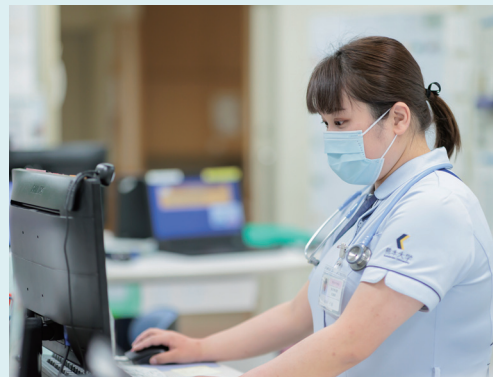


自治医科大学1年
大津 秀帆 さん(熊本市出身)

好きな授業は、解剖学です。実際に目で見て確認することで、人の体の仕組みについて、目からうろこの新しい発見がたくさんあります。部活は軽音部(JFC)に所属しています。ボーカルやドラムなどを先輩方に教えていただきながら楽しんでいます。将来は患者さんから信頼してもらえる医師になりたいですね。

地域医療の充実に向けた取り組み

熊本県の地域医療の充実に向けて、医療従事者のスキルの底上げが求められています。このような取り組みの一つとして、令和4年10月、熊本大学病院内に「看護職キャリア支援センター」が設置され、「看護職キャリア支援事業」が始まりました。同事業は、熊本県地域医療拠点病院と熊本大学病院間による看護師の相互研修を通じて、双方の看護職が看護実践能力及び、マネジメント能力を向上させ、病院間の連携を強化することで、熊本県の地域医療充実を目指す制度です。今回は、熊本大学病院で研修に励む田中千春さんに話を聞きました。



知識や技能を身に付け、難易度の高い診療の補助業務を行うことで地域医療の充実に貢献したい

私は、山鹿市民医療センターより、2022年10月から1年半の予定で、熊本大学病院で研修を行っています。熊本大学病院では、急性期看護のスキルアップなど多くのことを学んでいます。特に大学病院には、特定看護師の方がおられ、私にとっては大きな学びとなっています。自らのスキルアップをすることにより、医師の負担軽減や患者様への迅速な対応が可能となることを再認識しました。また、さらなるスキルアップのため、特定看護師を目指したいと思っています。

山鹿市は、高齢化が著しく、医療従事者の人手不足などさまざまな課題を抱えています。大学病院で専門的な知識や機能を身に付け、研修終了後には山鹿地域の医療の充実に向けて、タイムリーに患者さんの状態に合わせた適切な処置を行っていきたいと考えています。



田中 千春さん

地域医療の充実を、本県はサポートしています！

本事業では、研修生同士の意見交換や報告の場が設けられており、熊大病院への研修生からは「特定行為研修取得後の活動を直に学べる」、拠点病院への研修生からは「退院時指導の重要性に気づくことができた」等たくさんの学びの声が寄せられています。



熊本県健康福祉部健康局医療政策課
坂梨 隆太郎さん



熊本県健康福祉部
健康局医療政策課
看護班の皆さん

熊本県地域医療支援機構講演会を開催

「地域医療を支える医療機関の今とこれから」

2023年1月20日、「地域医療を支える医療機関の今とこれから」をテーマに講演会が開催されました。徳島県美波町国民健康保険美波病院院長の本田壮一先生と熊本大学病院総合診療科松田圭史先生にご講話いただきました。



「熊本の若手医師へのメッセージ」

20年後の地域医療を見据えた地域医療構想を

徳島県美波町は、少子高齢化が課題の典型的な海辺の過疎地です。同院は、医師・医療者不足という過疎地が抱える課題に関して、さまざまな取り組みを行っています。その一つとして、同院が位置する海部・那賀地域における医師不足の打開に向け、公立医療機関が一体となり応援診療などを行う医療提供体制「海部・那賀モデル」を紹介。地域全体で医療従事者をフォローする体制づくりに取り組んでいます。

教育面では、学生や医師たちが地域医療を体験する機会を増やすためのさまざまな取り組みも。その一つである社会医学実習では、徳島大学医学部の3年生が母子医療、学校保健、へき地医療、感染症の診療などを積極的に見学しています。

研究に関しては、本田先生自らが地域医療の学会や研究会で発表、世話人などを務めたり、大規模臨床試験へ参加することで、ネットワークの構築を図り、自身のモチベーションアップにつなげています。

災害時の対策としては、岡山市に本拠地を持つ「AMDA (Association of Medical Doctors of Asia)」の南海トラフ災害対応プラットフォームに参加。その他、コロナ対応やランサムウェアウイルス対策など、さまざまな災害への対策を実施し、ロシアのウクライナ侵攻への支援に関する視点を持つことも大切だと話します。

「vision and work hard」

熊本の若い医師へのメッセージとして、ノーベル生理学・医学賞を受けた山中伸弥先生の「研究者として成功するための秘けつはVWだ」という言葉を引用。「VW」とは「vision and work hard」という意味で「地域医療の現場では『work hard』な人は多いが、大切なのは『vision』である」と力を込めます。20年後の地域医療を考えると、地域医療構想(vision)をどう示していくのか、持続可能な地域医療をどう展開するのかという視点が大切であり、そのためには、地域の歴史を学ぶことや、まずは医師・医療者自らが健康になることが大切だと話します。

わたしたちは、地震や津波、新興感染症、コンピュータウイルス被害、戦争など、さまざまな災害にいつ見舞われるのかわかりません。東京圏より、10～15年早く高齢化・人口減が進んでいる四国・九州の若手医師は「世界最先端の医療」に取り組んでいるという気概を持って、さまざまな視点を持ちながら地域医療に従事してほしいとのメッセージで締めくくりました。



徳島県美波町国民健康保険美波病院 病院長 本田 壮一 先生



熊本大学病院総合診療科 松田 圭史 先生

地域医療の現場から

地域医療は併存疾患や機能低下がある高齢者が多いなどの特徴があり、スタッフの負担も大きいことを上げる一方で、土地の魅力を体験しながら、使命感を持って働けるメリットもあると話す松田先生。

地域医療を持続させるためには、従事する医師の増員や産休・育休などの支援体制の充実や、地域枠学生を含めた総合診療医の育成などのバックアップ体制の強化が必要と話します。また常勤医の負担減に向けた自身の構想として、熊本市内の医師が地域住民のオンライン診療を行った、総合診療医を中心とした「ドクターバンク」を設置し、緊急地域支援制度を整備することで、地域医療の充実が図れるのではと提言しました。